

ときの状況が脳裏をよぎる。家財の中には、妻の衣類が多く、妻に気の毒で断腸の思いだった。いつも冷たい眼を背に受けてはいたが、直接行動はなく、ぶじ日本人の集結地に着くことができ、再会を喜びあった。

男達の脱出の結論は、帆船で釜山まで行くことであつた。さいわいにして帆船が取得でき、官憲の調べもすみ、船出できた。この気持は、言葉にたとえようもない。昼は陸地にあがり、夜だけの逃避行、海水でご飯を炊き、小川の水をのみ、一週間後釜山に上陸することができた。まさに餓死寸前だった。長女は、母乳も出ず栄養不良でやせ細っていた。なんとかこの生命をと祈るのみだった。

釜山では、さいわいにして、日本軍の規律が存在していて、私共は生きる希望をもった。釜山第六小学校に収容され、一週間程度すごした。このとき、その校長先生の好意により、履歴書を書き、道庁の証明印まで取得することができたことは、不幸中のさいわいというほかはない。これが帰国後、復職に役立ったことというまではない。軍から避難民の証明をいただき、連絡船に乗船

し、山口県仙崎港に上陸したのは、昭和二十年九月三日早朝だった。

やっと内地に帰れたという喜びと、これからどうするか不安と、これが実感だった。

五人の子を一人で連れて

兵庫県 中原 治子

ソ連が満州に侵入したので、満州から着のみ着のまま引揚げてくる人で、釜山は騒然としていました。ところが、八月十五日終戦の詔勅が下り、満感胸に迫り、涙涙でした。主人は二月に三度日の応召で奉天にいましたが、三十八度線の閉鎖で釜山には帰ってこられなくなり、消息も絶えてしまいました。釜山の朝鮮人も立場が逆転し、不安は増すばかりです。

応召前は、釜山で小児科医院を開業していましたが、主人が帰ってきたら開業ができるかもしれないと思いい、家財道具、医療器具はそのままにして、とにかく着

のみ着のまま一刻も早く内地に引揚げる決心をしました。その時、長女は女学校二年、長男六年生、次男三年生、三男一年生、一番下の女の子は二月に生まれた赤ん坊でした。近所の人たちもつきぎ闇船で引揚げ、だんだん淋しくなりました。長女は近所の方のすすめで、一足先に闇船で出ていきましたが、手紙も何も通じなくなり、不安はつのるばかりでしたので、一家はどうして引揚げてよいか、あっちこちに聞きましたら、とにかく満州からの難民と一緒に並びなさい、とのこと、私は赤ん坊を背負い、手におしめとミルク、お乳を作るためのやかんを持ったら何も持てません。子どもたちにはめいめいの食糧、着替えの衣料を持たせました。そして、どうにか船にのせて貰い、仙崎に上陸しました。行き先は郷里の山形までは遠いので、今治の主人の母のところへいくことにしました。

当時は汽車も一杯で、窓から乗車しなければ乗れない有様で、小さい子どもを大勢連れての旅はなかなかで、乗換えのとき乗れなくなって泣いていましたら、駅員が荷物を入れるところに乗せてくれたのでやっとの思いで

今治につきました。今治は空襲で焼野原になっていました。子どもたちも疲れ果てて動けません。

どうしようかと思ひ、よく見まわすと母の住んでいる一角が焼け残っているではありませんか。まったく天の救いだったので。勇気をふるいおこして子どもを引張り歩きました。母と主人の姉、これも東京空襲でできおり、また一番心配した長女もぶじ着いて再会を喜びましたが、主人の消息はまったく分からず、これからの生活はまたたいへんでした。配給品だけでは命がたながれません。でも物物交換の物はなく、闇買いするにも老人子どもでは収入はなく、その中に軍人の恩給も留守宅手当も停止になってしまいました。私は子どもを姉にみて貰い、小学校の給食の手伝いにいきました。高りゃんの粉、お茶の粉末、まる麦の配給が主食、それに食べられる野の草や芋づる、大根等入れて増量し、いりこ、南瓜の種等粉末にしてふりかけ、塩、しょうゆ等も手に入らず、油等はくさくてにがく、それでも食べました。奉天にいたはずの主人から手紙がきたのは広東からでした。八路軍につかまって、蒋介石軍と闘いながら広東まできたと

のこと。そして、中国から引揚げてきたのが、二十八年四月、八年振りに帰ってきましたが、就職してはなかなかで、転転として今の所に落ちつき、四十七年に主人はガンで死亡しました。

閩船で脱出

高知県 種田繁寿

昭和の初年は非常な不況、貧農の三男に生まれた私は、将来に不安を感じていたさい、さいわいにも同郷の富豪で早くから渡鮮、金南で農場を経営していた大崎さんから、こないかとの誘いを受け、二十歳のとき、昭和四年秋、湖南線松竹里に渡り、働かせてもらっていた。

昭和七年三月初め、前年九月誕生した満州国の東部間島の延吉で商業を営んでいた生家近くの永野という方から、鮮語の判る者が欲しいと招きを受け、私も目的もあったので農場主の了解のもとに退職。同年十月満州へ。翌年八月、当時新渡満者に多発していた満州チフス

にかかり、危うく命を落とす羽目になる。十月末京城府に帰り、翌月警察官を受験。合格。四月一日、光化門警察官講習所に入所、三か月間の講習を受け、金北への出向。道本部で裡里署勤務。十二年十一月帰郷結婚。駐在本署内勤務を経て、同署梨坪面駐在署勤務中終戦となる。

翌朝驚いたことは、日の丸の赤の半分を濃紺で二つ色に塗り、四場に点々をつけた太極旗という旗が家々に林立していたことであった。すでに早くから準備されていたらしい。

私は朝鮮語もできず、また第一線に出た日から朝鮮人の立場からも物事を考え、処してきていたので、平常通りで迫害を受けることは無く、月末迄暮らしたが、署より官舎が一つあいたので引揚げてこいとの電話で、家財を整理し、馬車には荷物と子どもを乗せ、数里の道を徒歩で、夕方になった。終戦の苦難はそこから始まった。

在留邦人家族百六十人ぐらいで引揚げ団体をつくり、密航船で帰ることとし、代表者の交渉で軍部が援助してくれることになり、九月下旬トラック十数台を準備して